

今日のテーマは「聖書と出会った勝と龍馬とその一族たち」。これをお話しするために、先週の水曜日、司馬遼太郎記念館に行っておきました。ここから車で20分くらいで行けます。一見の価値ありますよ。司馬遼太郎記念館は、司馬さんが住んでいた敷地の中に建っています。彼が小説を書くために集めた資料が2万冊、その本棚が11m。これは約4階の高さです。すごいのは、単に集めていただけではなく、2万冊を読破して、その上澄み液のエッセンスのようなものを取り入れながら、自分の歴史小説の中に活かしていくのです。

記念館の隣の本宅は下から上まで全部本棚。廊下だけで46m。その左右の壁が全部書棚。そこに4万冊。つまり、司馬遼太郎（しば りょうたろう/1923-1996/T12-H8）は、6万冊の資料を読んでいたという事。司馬さんの小説は50数点しかない。という事は、一つの小説を書くのに1200冊調べている。これはすごいですよ！そこに行くと、司馬遼太郎の脳の中に入ったような感じがします。

その隣の小さな劇場で、彼が小説家・特に歴史小説家になったきっかけを話している肉声の動画を見ることが出来ます。司馬さんは戦争末期に、満州の戦車部隊として中国に派遣されていましたが、本土防衛のため日本に呼び戻され、栃木県の基地に駐屯しました。アメリカが本土、特にいきなり東京上陸もあり得るという事で、東京に入って来たら、栃木の軍隊はすぐに南に向かってザーッと動かなければならない。その作戦の演習が始まった時、上官に聞きました。「アメリカ軍が東京に入ったら我々は南下するけど、東京の人たちは北に向かって逃げて来ます。そうしたら、幹線道路で軍隊と避難する国民が衝突する。どうしたらいいのですか？」上官はひと言「踏みつぶして行け。」

その時の、どうにもならないやるせなさ・失望・ナンセンス・この昭和の戦争のリーダーの無能さ。彼は「アホさ」と言っていました。

「日本のリーダーは昔からアホだったのだろうか？ そんな事はないはずだ。少なくとも、幕末から明治にかけての日本人の指導者には、立派な人たちがたくさんいたはずだ。なぜなら、有名な歴史学者のアーノルド・トインビー（1889-1975）によると、トルコから東の国々の中で、ヨーロッパ列強の植民地にならなかったのは日本だけ。その時の指導者たちが賢かったから。」

「だから、今の無能な者ではなく、日本がもっと輝いていた時代・幕末から明治を掘って、我々日本人とは一体何者なのかを知るために、私は書き始めました。」

それで、彼の小説には色んな時代がありますが、幕末から明治維新の人たちがすごく多いのです。

明治を考える時、絶対に外せない彼の作品が幾つかあります。1つはエッセイで『「明治」という国家』。記念館には、その生原稿がありました。

「幕末の志士の中で、幕府を倒した後の青写真を持っていたのは坂本龍馬だけだ。『260年続いた幕府が倒れるだろうか？ いや、倒さなければならぬ』という事で、幕府を倒す事にゴール設定をしているから、実際に倒した後の国家の設計図がなかった。」

「ところが、坂本龍馬は幕府を倒した後の事まで見て、読む事ができていた。土佐の高知からやって来た龍馬が、そんな風に視野の広い人物になれたのは彼一人によるのではなく、勝海舟と出会ったからである。勝という人の触媒で化学反応を起こして坂本龍馬が生まれた。」

「勝は初めから先見性のある人物ではなく、カッテンディーケ（1816-1866）との出会いが触媒となって勝を造った。」

カッテンディーケといってもピンと来ないと思いますが、要するに、この本が言っているのは「龍馬を知るためには、彼を造った男・勝を知らなければならない。勝を知るためには勝を造った男・カッテンディーケまでさかのぼらなければならない。」

それで、私も真に受けてさかのぼってみました。その結果、1時間では終わりません。皆さんの膀胱の事も心配なので1時間で収めますが、龍馬を詳しく話す事ができないんです。

龍馬については、もう1回チャンスを下さい。龍馬の方がエピソード満載ですが、取り敢えず、この2人がどんな人かを紹介したいと思います。

勝…勝って新太郎じゃないですよ。勝海舟（1823-1899/文政6-明治32）。めちゃくちゃ貧しい家の人。

それで、剣術の名人と言われる島田虎之助（1814-1852/文化11-嘉永5）に預けられ、剣術修行を一生懸命やって、何と21歳で免許皆伝。達人になります。

しかし、この島田という師匠は「これからの時代は、刀振り回しているだけではどうにもならない」と。

勝が免許皆伝を受ける3年前にアヘン戦争（1840-1842）が起こりました。アヘン戦争とはイギリスが中国（清）を倒した戦争。その時の清の人口は4億人。4億の清が、わずか20隻のイギリス艦隊にボコボコにやられた。「これから日本を守っていくには、剣術が上手いだけではダメだ。西洋式軍艦や西洋式砲術を学んでいかなければならない。おまえはこれから蘭学をやれ！」

つまり「オランダ語を勉強して、オランダ語で書いてある世界情勢の本を読んでいきなさい！」

それで、勝は蘭学を始めようとしませんが、外国の原書を読む時に絶対に必要なものは辞書。グーグルない。アプリもない。蘭和辞典（オランダ語と日本語の辞典）「ツーフハルマ」があるけど、全58巻60両。この時の1両は12万円。だから辞書を揃えるなら720万円。

勝海舟の家、めちゃくちゃ貧乏。どれくらい貧乏か。ある寒い時、余りにも寒いから天井板はがして家の中で燃やしたと書いてある。それ、もっと寒いんちゃう？家の中から空が見えたって。

こんな人が720万円もする辞書をどうやって買えますか？でも、辞書がなかったら勉強できません。

ある時、その辞書を持っている人が住んでいる所が分かったので、そこに行って交渉しました。「順繰りに1年間貸して下さい。そうしたら、借り賃として10両（120万円）払います。但し、後払いにして下さい。」そして1年間、ずーっと書き写します。2部ずつ。1部は自分の辞書。もう1部は10両で売る。10両で返すつもりが、彼の蘭学の先生が30両で買ってくれた。助かる！アイデアというか、アイデアがあってもやりますか？

これが、彼の語彙力を飛躍的に上げました。他の蘭学者が知らない単語が、書く事によって、全部頭に入っている。彼は28歳で独立して、自分が塾長を務める蘭学塾を始めました。

そして30歳になった時、あの事件が起こります。1853年（嘉永6）「いやで（18）ござんす（53）、ペリーさん」。黒船ですよ。今、皇居・江戸城の周りは埋め立てて全部地面になっているけど、江戸時代は皇居のすぐ後は江戸湾。昔は、江戸城を上って天守閣から後を振り返ったら海。

その江戸城の近くまで蒸気船が来て、アームストロング砲でドカンドカーン。アメリカの独立記念日と重なっていて「自分の国の独立記念日を祝うのは当然だ！」と、猛烈な爆裂音を鳴らしながら脅した。その時、江戸城の徳川幕府の重鎮たちは、どうしたらいいか分からない。みんなで集まって話し合うけど、この海防策どうやったらいいのか、いくら話しても分からない。

そこで、外部の意見も聞いてみようという事になり、その中にいたのが勝海舟。この時、幕府に 700 通の解決策のアドバイスが届くのですが、勝の意見書が抜群！非常に具体的・実践的・有効で、読んだ人は皆感動。どれくらい感動したかという、老中の阿部正弘（あべ まさひろ/1819-1857）が感動して、「こいつ、何者?! こんな男が江戸の市中におったんか!」。阿部は島津斉彬（しまづ なりあきら/1809-1858）の親友。それで、勝は 33 歳にして初めて幕府の役人になり、その意見書の通りに動いて行くのです。

彼は幕府に入ってすぐに「長崎に行け」と言われました。長崎には長崎海軍伝習所という特訓所があって、オランダ政府の協力でヨーロッパで造られた軍艦を日本に持って来て操縦の仕方を勉強するのです。全国から秀才たちが集まって来るのですが、勝は最初から艦長候補として行きます。授業は全部オランダから来た海軍上官のプロが教えてくれる。つまり、伝習所での授業は全てオランダ語。生徒たちはオランダ語が分からないから、通訳がないとどうしようもない。しかし勝は、通訳なしで教師が言っている事が全部分かるので、教師は皆、勝を頼りにしました。

最初の教師団の団長は、ペレス・レイケンという人でクリスチャンです。彼は暇を見つけては、勝を散歩に誘いました。勝は彼がクリスチャンだと分かったので、道々歩きながら質問します。「ちょっと聞きたい事があります。プロテスタントとカトリックって、どこが違うんですか？ あなた方が信じているキリスト教は愛の宗教ですか？ では、なぜヨーロッパで宗教戦争があるんですか？」色んな事を聞いて、ヨーロッパの政治と宗教の絡みなど、どんどん知識を蓄えていきました。今の日本人も聞きたい話ばかり。でもそれは、全部外面についての話でした。

2 年経ってレイケンさんが帰国し、次の教師団が来ました。その団長がカッテンディーケです。この時カッテンディーケはヤパン号という 690 トンのスクリュー船に乗って来ます。これは幕府が 10 万ドル（15 億円）で買った船。これを練習船にして軍艦の操作を覚えようという事で、ヤパン号に乗って来てもらうのですが、これが後の咸臨丸（かいりんまる）です。

カッテンディーケもクリスチャンで、非常に敬虔で、知的にも素晴らしい人だったようです。というのは、オランダに帰国したら外務大臣になりました。軍の事しか分からないんじゃないじゃなくて、国際情勢についても大変明るい。非常に知的で、質問したら「分からない」と言う事が殆どないほど頭脳明晰。ヨーロッパの知性を代表するような人物。

日曜日、彼は 5 - 6 人の教師たちと甲板に集まって輪になり・手を組み・目を閉じ・頭を垂れて祈る。初め「何が起こったんやろう?」。その祈りはパンパンと手を叩くようなのとは違います。それは、まさに目の前にいる誰かに向かって話しかけるような、親しげな人格的交流というか、本当にそこにいる方に対してお話しているような祈り。

それが終わるとみんなで歌を歌う。「明日にかけの橋」ではないと思いますね。軍歌かと思ったら、勝はオランダ語が分かるのでよく聞いていると、それは讚美歌。オランダ語で神をたたえる歌を歌っている。その内容に余りにも感動した勝海舟は、何とそれを日本語に翻訳しました。「外国語で作られた讚美歌を、最初に日本語に翻訳した日本人は勝海舟だ」と音楽辞典に書いてあります。

彼はカッテンディーケたちの、いわゆる政治・経済などの話ではなく、実在している神を信じる、創造主に対する信頼を見た時、憧れのようなものを感じたのです。カッテンディーケは他の若者たちにも聖書の話をするのですが、目付（めつけ）がいて、「キリスト教の話をしないだらうな」と常について回る。だから、困った時にはオランダ語で話しました。

勝はカッテンディーケを通して、人間の価値とは何か・人間の価値の根拠はどこにあるのか・この世界の成り立ちとは何か・人間のルーツはどこまでさかのぼることができるのか・なぜ世界には混乱があるのかなど聖書からズバっと全部答えをもらいます。そうして視野が広がっていきました。

やがて「日本人の力だけで太平洋を横断したい。」幕府に言ったら許可が下りたので、勝は艦長として咸臨丸に乗り、37日間かけて太平洋を横断して、サンフランシスコに行きました。「日本人の力だけでやった!」実は、勝は船酔いにめちゃくちゃ弱くて、37日間、艦長室から一步も出て来なかったそうです。部屋で嘔吐しながら、他の人にやってもらったという記録が残っています。勝が大嫌いだった福沢諭吉（ふくざわ ゆきち/1835-1901/天保5-明治34）は、その事を明治時代になっても言い募っていました。嫌なヤツ。

とにかくサンフランシスコに上陸して、3週間余りアメリカに滞在する中で、日曜日が3回ありました。勝は3回とも教会に行き、礼拝に出席し、聖書メッセージを英語で聞いて、感動して日本に帰ります。帰国した勝はこの事を黙っていました。当時はまだキリタン禁制。彼がそれを公にするのは30年後です。心の中に深く残るものがあったのですね。

さて江戸に戻って来て、老中から「アメリカって、どうやった?」と聞かれたので「アメリカは高い地位にある人はそれなりに利口で、日本と正反対です。」そんな事を言ったら、老中はメチャクチャ怒る。でも、それが本音ですよ。「日本を変えて行くには、こうしなきゃならない。ああしなければ…」と言うのですが聞いてもらえない。

勝海舟は40歳の時、軍艦奉行並（ぐんかんぶぎょうなみ）という幕府の軍艦奉行/これからの日本をどうしていくべきかという事を扱う所の高い地位に就きます。その彼に、アポイントなしに面会に来た男がいました。それが坂本龍馬（さかもと りょうま/1836-1867/天保6-慶應3）。彼は脱藩して1年目の28歳。勝海舟は12歳年上ですから40歳。

龍馬は初め、勝に向かってケンカ腰でした。「幕府が外圧に負けて不平等条約を結んだから、日本の金（きん）がどンドン外に出てしまっている。朝廷に許可も得ずに、こんな不平等な条約を結んで。しかも、あんたは軍艦奉行なのに、外国の艦隊が来ているにも拘らず、追い払う気概もないのか! 情けないと思わないのか!」

これは有名な話ですが、勝海舟はバンと地図を見せて言いました。「この唐辛子みたいなのが日本だ。アメリカはこれやぞ。この風呂敷みたいな、こんなに大きい国が海を越えて黒船でやって来た。しかし、アメリカよりもっと凄いのがイギリスだ。イギリスは日本より小さいが、世界で1番繁栄している。それは、世界中におびただしい船を持っているからだ。日本は島国だが、世界から孤立しているのではない。海を通して世界と繋っている。海を握る者が世界を握る。だから日本がする事は、200-300の艦隊を造る事だ。金がないというのなら、その船を使って貿易して、後で返したらいい。先に物を貰って、それで動かすんだ。」みたいな話をドンドン続けていく。

すると、最初「こらっ!」と言っていた龍馬の心が変わって行って、その日の内に「弟子にして下さい!」『氷川清話（ひかわせいわ）』という本の中に、龍馬の事を「中々、気持ちのいい男よ」と書いていました。この本、勝海舟はべらんめえ調で「オレがオレが意識」が少し強く感じられますが、実に参考になります。龍馬はその日の内に、乙女（おとめ）姉さんに手紙を書きました。「私は日の本一（ひのもといち）の勝麟太郎（かつりんたろう）大先生のお弟子になりました。ラリホー!」みたいな感じ。嬉しいんです。

そして「先生が仰った通りの事をやろうではありませんか!」と、神戸に海軍操練所を造ります。龍馬はその塾長になり、町民も農民も職人もアウトローも浪人も、塾生として連れて来ました。高知から岡田以蔵（おかだ いぞう/1838-1865）を連れて来るんですよ。人斬り以蔵。とにかく「やる気のある奴は皆来い!」 岡田以蔵はやる気ない。だけど「お前はここにおったらエライ事になるから、こっち来い」みたいな。

この時が龍馬の人生の中で1番充実していたのではないのでしょうか。「大きな船を幕府の金で買ってきて、幕府を倒すための技量をここで身に着ける。こんな面白い事はないぞ。」それで、仲間たちと「明日の日本を築いていくんだ!」と神戸操練所で訓練するのですが、ここが1年で閉鎖になってしまいます。

1864年、この操練所をやっている時に大事件が起こりました。それが池田屋事件。池田屋は京都の旅籠・旅館で、そこに幕末の志士たちが約30人集まっていました。黒船から約10年。不平等条約で10年経って、日本の中には不満がいっぱい溜まっていたのです。

日本は世界で1番、金（きん）が採れる国だったんですよ。金は火山地帯で採れます。日本はどこ掘っても温泉がある。北田辺にもあります。どこでも地震がある物騒な所。しかし、金は火山帯に集中してできるんです。今まで人類が掘り当てた金の総量は、分かり易く言うと、オリンピック競泳プールの3杯分。その内の1杯分が日本だけにあった。南アフリカなんか目じゃない。世界最大の金鉱を持っていたのが日本。

ところが、幕末に金（きん）がすっからかんになってしまった。金と銀の交換比率が、世界とかけ離れて不利だったから。不利なままで、レートを固定された条約を結ばされたので、日本中の金が全部出て行ってしまったのです。「こんな不平等な事されて、こんな屈辱受けて、幕府は腰抜けだ! 尊王攘夷（そのんじょうい）するべきだ!」。その機運が盛り上がっていたのです。

この段階で「外国を武力で追っ払え!」と最も主張していた藩が長州藩。長州藩はめっちゃくちゃ過激。「日本を尊王攘夷でビシッとまとめる1番手っ取り早い方法は、天皇に自分たちが思っている通り、『尊王攘夷で突撃しろ』という詔（みことり）を出して頂く事。天皇に俺たちの言う事を聞いてもらう事だ。」それで、長州藩は朝廷の中で色んな工作活動をしますが、天皇に言う事を聞いてもらうため、最終的に、天皇を誘拐して長州まで連れて行くという案まで出ている。もう、過激を通り越しています。だって、吉田松陰（よしだ しょういん/1830-1859）から来ているから。私はあの人好きだけど、ちょっとこれはついて行けません。

で、池田屋に30人の志士たちが集まって、どうやって長州のビジョン/尊王攘夷を実現しようかと話していた時に、いきなり京都の治安部隊が踏み込んで9人殺して20人逮捕しました。この治安部隊が近藤勇（こんどう いさみ）・土方歳三（ひじかた としぞう）・沖田総司（おきた そうじ）の新選組。新撰組のスポンサーが会津藩。

ところが、殺された9人の中に神戸操練所のメンバーがいた。つまり、尊王攘夷の超過激思想者の中に、勝海舟が責任を持っている神戸操練所のメンバーがいるという事は、「勝は幕府を倒すための連中に、そんな事を教えているのか!」。それで閉鎖されてしまったのです。

ここから、時代がどんどんと進んでいきます。池田屋事件の後、幕府は長州藩をぶっ潰す絶好のチャンスだと考えて、「長州藩は天皇誘拐までも考える極悪集団だ」とレッテルを貼りました。

「名誉棄損だ！ 朝敵のレッテル貼られた！」これを剥がすために、長州藩は一か八かの大ばくちに出ます。これが、蛤御門の変（はまぐりごもんのへん/1864. 8. 20/元治元年 7. 19）。

当時、天皇は御所から一步も出ませんでした。なので、御所の周りを屈強な長州軍で囲み、中に入って、天皇がおられる周りを固めて、「言う事、聞いてくれますよね」と言えば、聞かざるを得ないだろうという発想。それで、久坂玄瑞（くさか げんずい/1840-1864）たち先遣隊がバンと入って行きます。

守っていたのが会津。2千の長州対2万の会津。長州が勝った。ものすごく勇敢。そして御所の中に入り、天皇の所まであと一步という時に、隣から別の軍隊が来て立ちちはだかった。それが西郷の薩摩軍。あと一步で辿り着けたのに薩摩がやって来て、そこで戦争になり、長州は大惨敗。そのまま戻るのですが、追いかけられないように、京都に火を点けながら帰ったので京都は三日三晩火事。

ようやく長州が地元に戻り着いたら、今度は外国艦隊が下関に砲撃を始めました。泣きっ面に蜂。なぜ、外国艦隊が下関を攻撃するのか？ 1年前に馬関（下関）海峡を通過する外国船に、長州が大砲を撃ったからです。1年後に仕返し。イギリス・フランス・オランダ・アメリカの4カ国連合が長州を攻撃して、下関がボロボロになりました。

「これは長州藩を潰す絶好のチャンス。これを逃すな。」幕府が長州を討伐する最高責任者に任命したのが西郷隆盛。彼の頭の中には、こんな計画がありました。長州を支配した後で2つに分けて、半分は天皇の御料（ごりょう）。もう半分は長州討伐に参加した藩で山分け。自分がほとんど貰おうという考えです。蛤御門の変から2か月後、腹を決めて行こうとしていた時に、「ちょっと待て」と会いに来たのが勝海舟。

勝はこう言いました。「今の幕府には、もう政権担当能力はない。皆私利私欲に絡め取られて、ふんぞり返っている連中だ。長州は蛤御門で負け、外国艦隊にも攻撃されて足腰立たないから、今行ったら勝てると思っているのだから甘い！ あの藩はそんなんと違う。ここで無理に突っ込んで行ったら、ゲリラ戦に引き込まれ、泥沼戦争になり、日本国内で消耗戦争が始まる。それを一番喜ぶのは外国だろ。国の中で争わせて、弱って行くのを待っているぞ。だから、長州を潰すのは止めた方がいい。」

「これからの日本は、主な4つ・5つ・6つくらいの藩が1つにまとまったら、外国に恥ずかしくないような外交や戦略を練る事ができるだろう。長州は主だった藩の1つだ。今それを潰すというのは、自分で自分の五体の足や腕をもぎ取るのと一緒や。」

勝海舟は幕府の人間なのに、「幕府には政権担当能力ないからやめとき」と言っているわけですよ。

それを聞いた時、西郷隆盛は「ひどくほれ申し候」と大久保利通に手紙を書いています。その手紙を読みました。もうぞっこんです。西郷に「薩摩と長州が同盟を結んだら幕府を倒せるぞ」というアイデアを注入したのが勝海舟です。

しかし、理論で分かるのと、実際に実行するのは別なんですよ。もう薩摩は長州が大嫌い！ 長州も薩摩が大嫌い！ この犬猿の仲の薩摩と長州を結べば明治維新は成る。結ばなかったら維新は来ない。だから結ぶべきだ。理論では分かるけど、それができない。

それをできるようにしたのが坂本龍馬です。どうしたのか？ 長州のトップ/代表に木戸孝允（きど たかよし 1833-1877/天保4-明治10）がいます。桂小五郎（かつら ござろう）ですね。龍馬は木戸に言いました。「もうすぐ、幕府軍 36 藩が合同で長州に攻めて来る。長州は今やったら負けるで。だって武器がない。

でも、勝つ方法が1つだけある。それは、イギリス式の新兵器を大量に購入して使う事や。旧式武器でなれば固められていても、新兵器を戦略的に使ったら勝てる。これ以外に長州が勝つ道はない!

ところが、長州は幕府と対立し、禁門の変(蛤御門の変)以降、天皇に弓を引いたという事になっていて、外国はどこも長州に武器を売ってくれません。「このままだったら、お前死ぬぞ」という事。「俺の所に武器を売ってくれる国がない」と木戸。

その時龍馬が「方法はある。俺、実は会社造ってん。」亀山社中(かめやま しゃちゅう)。これは日本初のカンパニー/株式会社。亀山社中が薩摩の名義でイギリスから新兵器を買い、それを長州に売り、長州は亀山社中に金を振り込む。「そうしたら、長州は見たくもない薩摩の顔を見なくて済むし、金だけ取って武器を渡さない事もあり得ないし、間に商社を挟む事によって、嫌なヤツを見ないで1番欲しい物を貰えるでしょ。」「ええ方法や。」

「そのついでにもう一個。薩摩が長州を助けたという事が分かったら、幕府を裏切った事になるから、やがて幕府は薩摩にもプレッシャーをかけるだろう。その時のために、薩摩は兵糧・米を必要としている。薩摩は芋はあるけど米がない。長州は日本で1番農業改革が進んでいるから米が余っている。その米を売ってくれ。これを共存共栄と言うんや。」

右の物を左に持って来て、左の物を右に持って来て、薩摩は喜び、長州も喜び、亀山社中はホクホク! これで、薩長同盟が成るんです。

後に、龍馬はこう言ってるんですね。「イデオロギーにこだわってたらあかんで。イデオロギーで話し合って解決するのは絶対無理や。世の中は経済・利害で動いているから、嫌な奴からでも、欲しい物は買うやろ。」これで、薩長同盟の締結に成功しました。この段階で、明治維新は、もう9割成ったも同然です。

亀山社中は、後に土佐商会と合併して、有名な海援隊(かいえんたい)になります。海援隊の会計係が岩崎彌太郎(いわさき やたらう/1835-1885/天保5-明治18)。三菱グループの総帥です。

海援隊を通して色々なビッグビジネスをやって行くのですが、単なる貿易だけではなく、出版事業にも手を染めて3冊の本を出版しました。その内の2冊は、龍馬が暗殺された後に出版されたので、龍馬が関与したと言い切る事はできません。

しかし、龍馬が生きていた時に海援隊が出版した本が『閑愁録(かんしゅうろく)』。「閑愁」とは「折に触れて思う事」。この本は日本の宗教政策について述べています。貿易商社である海援隊が、なぜ宗教政策について語るのか?

書き出しの部分を現代訳にしたものを読みます。「近頃、西洋の耶蘇教(キリスト教)が三港(横浜・長崎・函館)で大変盛んになり、西洋の僧侶が天主堂を建て、愚かな民衆を惑わしている。三港の中でも長崎が最も盛んである。その付近の浦上・大浦の村民の中から、競い合って弟子となる者が3,000人に及んでいる。その教えが言うには、その教義を信仰するならば、貧しい者は必ず富み、愚かな者は必ず知恵が付く、卑しい者は必ず高貴になり、病気の者は必ず治る。」

言外に(そんなバカな! ナンセンスだ! あり得ない!)という声が聞こえてくるようですね。

「それに加えて、耶蘇自らが磔(はりつけ)にされて殺され、万人の罪障を償い、天の神に感謝したという説を主張するがために、この教えを信奉する者は、極刑に処せられる事によって自らの栄誉とする。」(狂信的じゃないか!)「甚だしい者は、自ら望んで十字架にかかって死ぬ者もある。」(狂ってるぞ!)

「その教えと言え、恐らく全ては空論と言えようなもので、その説が語るところは因果応報・天国地獄の教えとは似て非なるもので、ただ単に、欲に弱い凡庸な者を惑わしているのであろう。であるならば、普通の道理や法律の刑罰によって禁制にする事など、決してしてはならない。」

これがどんな状況で書かれたかという、江戸末期から明治の初めは、キリシタン禁教令がまだ有効なので、この3,000人ほどのキリストを信じた人たちは、全国に飛ばされて迫害を受け、拷問されました。殉教した人が700人くらい出ています。「こいつら、禁令に逆らったから、処刑されても当然だ!」

それに対して閑愁録は「彼らは荒唐無稽な事を信じている可哀想な奴らだから、一々目くじら立てる事なく、弾圧したり迫害するのではなくて、禁令をやめるべきである」という五経（ごきょう）。つまり、一見キリスト教の悪口なのですが「もう、やめたれや!」と言っているわけです。この微妙な言い回し、分かりますか？ この文章を起こしたのは長岡謙吉（ながおか けんきち/1834-1872）で、坂本龍馬が1番信頼し、『船中八策（せんちゅうはっさく）』をまとめた人です。龍馬が言った言葉をまとめた人。

長岡謙吉は、土佐にいた時に長崎に医学留学するのですが、そこでキリシタンになったのではと疑われ、すぐに呼び戻されて医者になる道を絶たれ、4年間の謹慎生活を強いられました。彼がキリシタンだったのかは分かりません。でも、キリシタンになったのではと思われるだけで、自分の将来を棒に振る時代。その時に「キリシタン弾圧やめろ!」と言ったらまずい。「こいつらは可哀想な奴なんで、もうええやん。」一見ケチをつけているように見せながら、実は庇っているという文章です。では、なぜ海援隊がキリスト信仰を庇うんですか？

実は、坂本龍馬は聖書を読んでいる。土佐にいる間に、既に読んでいました。坂本龍馬には3人のお姉さんがいます。有名なのは乙女（おとめ）姉さん（1832-1879）。1番下のお姉さんで、女子プロレスラーみたいな人。1番上が千鶴（1817-1862）というお姉さん。高松順蔵（たかまつ じゅんぞう/1807-1876）という儒学者に嫁ぎました。彼は家で塾を開き、子息を受け入れて、孟子の教えなどを教えていたのですが、儒学者なのに論語を教えるだけでなく、漢文で書かれた福音書（聖書）を使っているのです。龍馬は高松順蔵が大好きで、若い頃から彼の家に入り浸っていました。

同じように弟子になった人に、中岡慎太郎（なかおか しんたろう/1838-1867）がいます。彼らは子供の頃、高松から漢訳聖書（中国語で書かれている聖書）をずっと聞いて育って来たのです。何よりも、龍馬が師事した勝海舟自身が、聖書に対して非常に好意的だったのです。だから、悪口を書かなかったという事です。

ここで龍馬に行かないと。ですがダメです。あと15分しかない。困ったと思いながら話しているんですが…。で、もう明治に入りました。

坂本龍馬を暗殺したのは誰か分かっています。会津藩の家老・手代木勝任（てしろぎ かつとう/1826-1904）。京都見廻組（みまわりぐみ）隊長・佐々木只三郎（ささき たださぶろう/1833-1868）のお兄さんです。最近出て来た資料で、龍馬の暗殺を命令したのは、最後の会津藩主・松平容保（まつだいら かたもり/1836-1893/天保6-明治21）。龍馬の暗殺犯については色んな説があって、すごいのはフリーメーソン。なんでやねん。会津です。それはちょっと置いて、もう明治。いいですか。明治になりましたよ。

明治になった時、勝海舟は明治政府からちょっと距離を置きます。

勝も、龍馬や他の人たちが夢見ていたような、身分や出身藩などという事にこだわらず、能力がある者には誰にでもチャンスがあるという政治や国造りを考えていたのですが、明治政府のメンバーと言ったら、薩長土肥（さっちょうどひ）の勝ち組の中で政権を回すだけ。「こんな中途半端な、妥協の明治政府に協力するのはくそくらえだ!」というところがあったんでしょ。西郷隆盛があんまり言うから明治政府に協力するけど、ひと月で辞める。というのが3回続きました。結局、明治政府から距離を置いて、東京赤坂氷川町に広い土地を買い、そこに邸宅を建てて、ご意見番みたいな事をします。

勝の所には色んな相談事が来たのですが、明治8年（1875）頃、アメリカ人一家が陳情に来ました。ホイットニーという一家です。彼はアメリカで商業学校・簿記学校の校長先生だったのですが、学校経営が上手くいかないと思っていた時に日本からの招聘を受けました。日本初の文部大臣・森有礼（もりありのり/1847-1889/弘化4-明治22）が商法講習所という学校を造るので雇ったのです。これが今の一橋大学。

ホイットニー氏（1825-1882/文政8-明治15）は、妻のアンナさんと3人の子供ウィリス・クララ・アデレイドの5人で来日したけど、アメリカで聞いた時の条件と、日本で言われた条件が全く違っていました。それに、森さんと教育方針が対立して「もうやってもらわなくて結構!」と解雇された。家財道具も全部売り払って来日して、日本に知り合いが全然いない。しかも、当てにしていた仕事は採用されず、蓄えはどんどん底を尽いて、困ったアンナさんが通訳付きで勝海舟の家に行ったのです。

勝はその窮状を聞いて「私はその講習所に千円寄付したんだ。大口の寄付だ。よって寄付金の使い方には口出しができるから、千円のうち五百円はこの一家のために使えと言っておく。」今だと数百万円。これで、何とか乗り越える事ができました。

来日して3年目。勝は「外国人居住区にいても日本人との接点が少ないでしょ。良かったらウチに住めば？ウチすごく広いから、敷地に家建てていいよ。」彼らは勝海舟の家の中に、家を建てて住みます。この段階で、家族同然の付き合いが始まりました。ホイットニー一家はクリスチャンで、特に奥さんは非常に敬虔なクリスチャンでした。

長男のウィリスは東大の医学部を出ますが、アメリカの学位も取っておいた方がいいという事で、4年になった時に全員でアメリカに帰ります。帰りの旅費も勝が出しました。ペンシルベニア大学で優秀な成績で学位を取って、再度日本に行こうとするのですが、その時ホイットニー氏は体調を崩しており、アンナさんもどうも体調が優れない。しかし、最初の来日の時、日本人が大好きになって、なんとか日本に正確なキリストの事を伝えたい。それで、無理してロンドン経由で来日するのですが、ロンドンに停泊している時に、ホイットニー氏が亡くなりました。

一家は大黒柱を失ったので、アメリカに戻るという選択肢があったのですが、アンナさんが「どうしても日本に行きたい。日本人にどうしてもキリストを伝えたい。」無理して日本に来て、再び勝の自宅の中で生活をします。実は、アンナさんは癌でした。どんどん悪くなり、最後はモルヒネでも痛みが引かないという状態になったのですが、死そのものに対する恐れが全くない。痛いのは痛いんです。でも「私は死んだらどこに行くのか知っている。鍛錬して死の恐怖を乗り越えたんじゃない。私には希望がある。私の命は、死んでも必ずキリストの下に、天国に帰る事ができる。」

そのやり取りや立ち居振る舞いを、同じ敷地の中で見ていく中で、勝は彼女の生き方にどんどん惹かれていきます。お母さんが亡くなった後、ウィリスは勝から敷地に教会を建てる許可を得て、教会と病院を建てました。それで勝は、ますます聖書メッセージを聞くようになったのです。

彼女が亡くなった翌年、勝は突然思いついたように、西郷隆盛を偲ぶ歌を大きな石に彫らせて、自費で自分の故郷である葛飾に建てました。どんな文か、私なりに訳してみました。

「慶応戊辰（けいおうぼしん）の春、君は大軍を率いて江戸に迫った。人心は不安に陥り、市民は大混乱に陥った。それを憂いた私は手紙を君の陣営に託した。君はそれを受け入れて命令を下し、進軍をやめた。君は、江戸百万の民衆を苦しみから救ったのだ。君よ。君ほど私を理解してくれる者はいない。そして、私以上に君をよく理解する者は、この世にはいない。」

これは勿論、江戸無血開城の事を詠っています。

もし西郷が引き返さなかったら、江戸は火の海になり、日本は外国に攻められていた。そして、明治はもっと別の形を取っていた。これは誰も否定できません。この時点では、西郷は西南戦争をやったために、反政府主義者のレッテルを貼られた極悪人なんです。でも「西郷がやった事の本当の意味を私は知っている。それを黙ったままではおれない!」という事で書いた。

それを触発したのがホイトニー夫人でした。一般の日本人は「十字架にかかって死んだキリストは失敗した宗教者。弱々しい者。所詮、処刑されて死んでおしまい」という間違った理解を持っています。

「キリストは何のために十字架にかかったのか。」と「死んで終わりではなく、よみがえったのだ。」この真相を知らないまま、表面的な理解で終わっている日本人に、何としても本物の事を伝えたいと再びやって来たホイトニー夫人。それに触発されて、勝は西郷の名誉回復のために動いたのでした。

勝は亡くなる直前、アメリカから来たニーダムという伝道者から、聖書のお話を通訳付きで聞きます。

Ⅱコリント 5:20-21 こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。

聖書のメッセージをひと言で言うと「和解のメッセージ」。神と和解させていただきなさい。

伝道者ニーダムが聖書メッセージを伝えた時、勝は耳を傾けて話を聞き、最後にニーダムが「この事を受け入れたいですか?」と聞いたら、勝は躊躇しながらも「はい」とうなずきました。

「では、一行ずつ祈りますから、その通りついて来て下さい。」一緒に祈った。

祈り終えて立ち上がった時、勝の目は涙に濡れ、ニーダムに抱きついて、握手をしてこう言ったそうです。

「人生の中で経験した1番の恵み、それがこの瞬間です!」

勝はイエス・キリストを信じたという証しをウィリスにもしています。複数の証言があるので間違いないでしょう。殆ど知られていない事ですが、勝海舟はクリスチャンになったのです。

彼が和解のメッセージにひどく心揺さぶられたのには、理由があったと思います。勝海舟には「死ぬまでにどうしてもしなければならぬ」と自分に課していた仕事がありました。それは、明治天皇（1867-1912/嘉永5-大正元）と徳川慶喜（とくがわ よしのぶ/1837-1913/天保8-大正2）を和解させる事。

和解というのは、両方が和解したいと同意して初めて成立しますね。握手は、両方とも手を開くからギュッと握り返す事ができるのであって、両方ともグー握っていたら握手できません。

明治天皇にしてみたら、徳川慶喜は最後は朝敵。朝廷に逆らった人。そして自分は彼の権力を奪い取った。今自分が住んで皇居と呼んでいるのは、そもそも徳川家康が江戸城として造った所で、慶喜がずっと住んでいたのを追い出して自分が住んでいる。

慶喜にしてみたら、最後の最後で朝廷に逆らったという朝敵のレッテルを貼られているので、ずっと日陰者。そのために、自分のかつての部下も日陰者として終わっている。

この2人は、お互い会いたくない。でも、時代の巡り合わせでこうなってしまったけど、元々は親戚。一部始終を知っている勝としては和解させたい。これができるのは自分を置いて他にいない。和解するためには、まず慶喜と話ができる人でないとダメですよ。最後の最後まで慶喜を守るために活躍したのが勝ですから、勝の言う事だったら慶喜は聞くんです。

明治天皇はどうか。天皇が即位したのは16歳。今の年齢だと14歳。中2で天皇って大変と思いますよ。だから、実際には西郷・大久保・木戸という大立役者と共に進んで行った。彼らは「明治政府の元勳」と言われて偉い人になっているけど、はじめはペーペーでした。この時彼らは既にもいないけど、勝はこの3人をよく知っています。それで、明治政府も勝に対しては一目置いているし、明治天皇も彼の言う事には耳を傾けるのです。

慶喜も聞く。かつ明治天皇も認めてくれる。両者に声をかける事ができる立場にあるのは自分しかない。それで奔走します。そして、明治31年3月2日だったと思いますが、慶喜が皇居に呼ばれ、そこで初めて和解したのです。和解した事を公式に発表した後、非公式に明治天皇が徳川慶喜を誘って、こたつがある部屋に行き、天皇と皇后と慶喜が同じこたつに入ったと。みかんをむいたとは書いてませんよ。だけど「皇后陛下が慶喜に晩酌した。慶喜が『美味しい』と飲んだ」という話が残っています。

明治天皇は胸のつかえが取れ、もちろん慶喜も嬉しい。というのは、慶喜は今まで無冠でしたが、この瞬間に侯爵の地位を貰ったのです。徳川侯爵にケチをつける人は、その地位を与えた明治天皇を否定する事になるから誰も文句を言わない。これから胸を張って歩む事ができる。それで両者とも嬉しいのですが、それが成った時、仲介者として勝自身が非常に嬉しかったのです。彼は生涯に於いて、和解の務めを幾度も経験しています。この経験は「和解を果たすために、神が立てたイエス・キリストのメッセージはありがたいものである」と理解するのにすごく役に立ったと思います。

人間同士の和解は、そのつもりがない者同士を、仲介者が説得して手を結ばせるという事。聖書のメッセージでは、この世界をお造りになった創造主が、自分を無視して離れ去って行く人間に向かって、神の方から和解を申し出ているのです。

その和解が成立するために、**Ⅱコリント5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。**キリストが十字架にかかったのは弱かったからではなく、和解の根拠を与えるためだったのです。

勝の三男・梅太郎はホイットニー夫妻の娘クララさんと結婚して、6人の子供が与えられました。しかし、彼は大変生活力のない人だったので、「こいつとおってもあかんから、あんたらアメリカに帰れ」と言って、アメリカに帰った彼女たちに仕送りをしていたのが勝海舟だと言われています。

それはともかく、私たちが日頃聞いている歴史というのは、内面ではなくて、やった事・行なった事だけが脚光を浴びているのではないのでしょうか？ しかし歴史の大立役者も1人の人間。それぞれが多数の問題を抱えていました。その問題の解決者としてキリストと出会ったという人たちが、日本にも本当にたくさんいるのです。

多くの問題を解決した人であっても、自分自身の人生の問題を解決できない事があります。罪と死の問題は、特にそうです。その問題を解決できる方がイエス・キリストなのです。

ところで、ひと月前に「西郷どんと聖書」という講演をしましたが、2人の方からメールが来ました。1人の方は、自分のひいおばあさんの女学校時代の入学写真をデータで送って来られました。その学校は神戸英和学校で、現在の神戸女学院。神戸英和学校はミッションスクールで、宣教師が建てた学校ですが、このおばあさまの隣にいる人が西郷隆盛の孫だという事です。「えーっ!」

暫くして、別の方から同じ写真が送られて来ました。

「神戸英和学校の校則/モットーは『愛神愛隣』。西郷隆盛が大好きな四字熟語は『敬天愛人』。この2つは同じです。あなたの造り主である神を愛し、あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい(マタイ 22:37-39)。これは『天という神を敬い、自分自身のようにあなたの隣人を愛しなさい。』と同じです。西郷が聖書から読み取った理想と、西郷の孫が通った学校のモットーが同じなのは、奇跡ではないでしょうか。」「おお! そうですか!」

皆さんの方が耳寄り情報を持っているんじゃないでしょうか。是非教えて下さい。

「聖書は日本人にも決して遠くない書物なんだ」という事を分かって頂ければ幸いです。ご清聴ありがとうございました。



Figure 1
司馬遼太郎



Figure 2
勝海舟



Figure3
阿部正弘

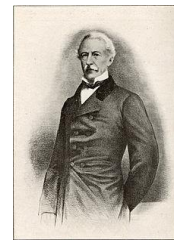


Figure 4
カッテンディーケ



Figure 5
坂本龍馬



Figure 6
長岡謙吉



Figure 7
明治天皇



Figure8
徳川慶喜

Figure1-8 : Wikipedia

どうぞ、イエス様を信じて下さい。心からお勧めします。

* 動画の検索は「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」ぜひ観て下さい。

* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(15分)も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。動画筆記 : Rumi